



教職大学院 Newsletter

No. 57

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2013.11.16

附属/大学/大学院の三位一体の改革が 教員養成を変える

福井大学大学院教職開発専攻長 松木 健一

文部科学省の平成26年度概算要求が明らかになった。その中の国立大学機能強化費として、福井大学が提出した「附属/学部/大学院を融合し教師の生涯にわたる職能成長を支える研究実践型教師教育システムの構築—三位一体の改革を通して大学教員・院生・学校教員・附属の子が変わる学校ができる—」が、教員養成系大学・学部として唯一ノミネートされており、実現の可能性が高くなっている。

この教師教育改革の事業案の背景と概要を説明しよう。現代社会は、グローバル化する中で着実に知識基盤社会が進行し、子どもに培うべき学力が変化してきている。しかし、それに対応できる教師教育の高度化・専門職化が実現できていないのが現状である。むしろ逆に、大学進学率の上昇による大学のユニバーサル化の中で、課程認定大学の多くは、安易に教員免許状を出し、教員資格の社会的ステイタスを下げていることを幫助してしまっている。

この原因の一端は、大学で教員養成に携わる者の多くが、戦前の師範学校教育の反省を踏まえ、教師の専門性を追求・研究することに躊躇していたからであろう。さらに、その反省から掲げられた戦後の「教師は優れた教養人であるべきである」といった理想は、一芸に秀でれば(教科の専門を深く修めていけば)良い教師になれるという論理にすり替わり、結局のところ、教員養成系大学・学部における教員養成も、理学部・文学部のそれと変わらないとの批判を受けることになってしまった。

こういった現状の中で、実際の教員養成系大学・学部はより深刻な事態となっている。建前としての教職科目重視の一方、教員採用を考慮し複数免許取得に対応し、過密履修状態になっている。また、同一教科内の

異なる学問領域のバランス重視等が相まって、教員養成のための「一貫性と統合性」という視点に乏しいまま、コンパートメント化した科目が並ぶことになってしまっている。これらの科目を担当している現在の教員養成系大学・学部の過半数以上の教員は研究者教員である。研究者教員とは、教育実践とは異なる専攻分野で研究業績がある者で、各自が学校教育とは異なる固有の学問領域での研究者である。

一方、資質能力の具わらない教員の出現は、大学における教員養成への批判を生むと共に、教師を徹底した実践的スキル訓練によって鍛え直そうとする風潮を生み出した。教育委員会による教師塾の設置や、大学における実務家教員の雇用は、このような流れの中で教員養成改革を求めて取り入れられて来たものであろう。実務家教員とは、専攻分野でおおむね5年以上の実務経験(教職大学院では20年)、及び、高度の実務の能力保持者で、学校等の退職教員である場合が多い。しかし、大学教育についての学習機会が

内容

附属/大学/大学院の三位一体の改革が
教員養成を変える (1)

報道ファイル (3)

合同カンファレンスに参加して (4)

拠点校だより (7)

幼児教育研究会に参加して (11)

学校組織マネジメント

指導者養成研修に参加して (12)

書評 (14)

教職大学院 OPEN CAMPUS 案内 (15)

拠点校研究会案内 (16)

なく、実務から離れて座学ベースで授業をしなければならぬこともあり、経験主義的になりやすいとの批判がある。

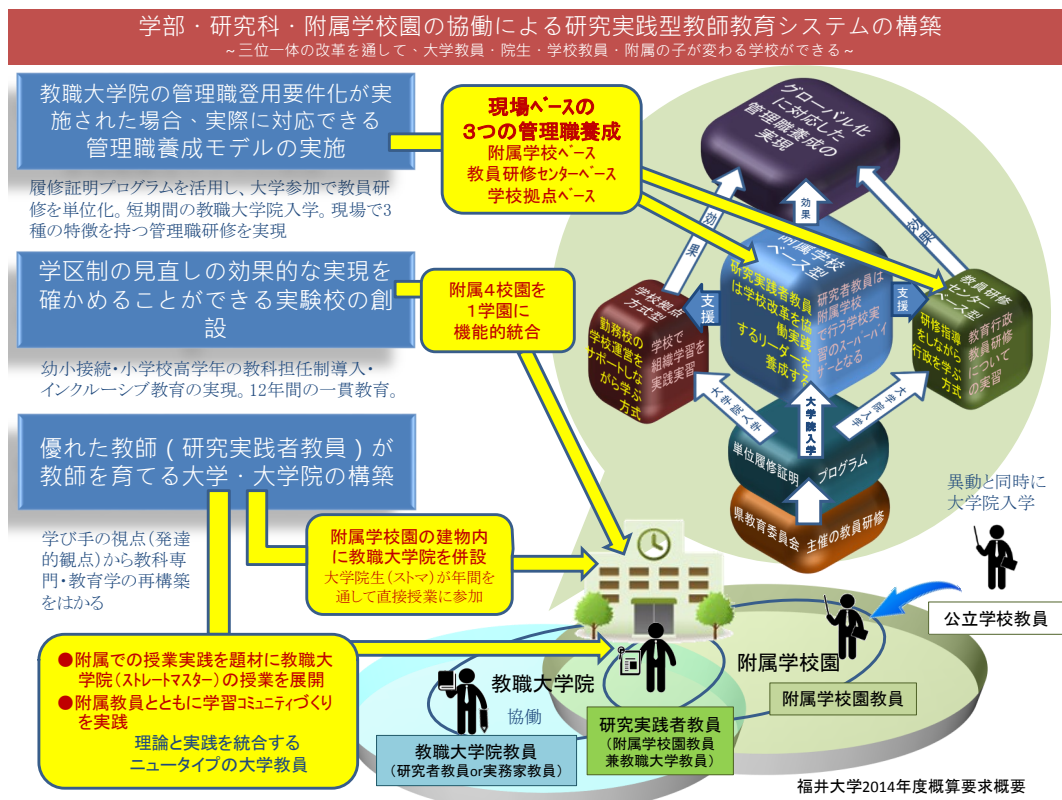
いずれにしても、教師の専門性への追求がなければ、「一芸に秀でれば…」論も、実践的スキル訓練重視論も、共に教師の仕事に「イージーワーク」に貶めてしまうことになりかねない。さらに、結局のところ両論とも知識伝達・蓄積型の学習観に立っており、知識基盤社会が子どもに求める学力とは異なってしまっている。教師は指導・伝達・訓練によって鍛え、その教師は、探究・活用力や協働する力を子どもにつけるなどということはあるにないことである。

今求められているのは、教師の専門性を高め、生涯にわたる職能成長を支えていくことのできる教師教育である。そして、「理論と実践の融合」というような当たり前のことを敢えて言わなければならないような教師教育から脱却することである。そのためには、医学部外科の教授が手術するように、教員養成系大学・大学の教員自身が、附属学校で子どもに実際に授業を行い、その授業プロセスを学生に公開し、表現し、理論化する省察的实践を行うこと、あるいは、大学教員が実際の授業プロセスに同伴し授業者と協働しながら実践の意味を再構築できること等が重要であろう。このような教員をここでは研究実践者教員と呼ぶ。本事業は、研究実践者教員を教員養成の中核に据えていこうとするものである。

一方、教師の生涯にわたる職能成長を支え、学校改革を促進させるためには、改革の指向性を持った管理職養成が重要である。そして、管理職希望者全てが無理なく学ぶことができ、しかも実践から離れた座学ではなく、実践と省察のサイクルの中で学ぶことのできる仕組の構築が求められる。その一翼を担う方法として、本事業では附属学校における管理職養成を検討し、附属学校教員がリーダーとして同僚との協働探究を組織しながら管理運営を学ぶ仕組を模索する。

本事業の3つめの目的は附属学校改革である。本事業では上述の目標を実現すべく、大学（学部・大学院）と附属学校の機能分担を根本的に見直し、両者が融合した新たな組織編成を実施する。これまでの4附属学校園を機能的に融合させ、1学園とする組織にすることで、効果的な学制（校種の在り方）に関する教育研究を実施する。幼小の授業連結、小学校高学年の教科担任制の導入、通常学校におけるインクルーシブ教育の推進と特別支援学校の役割など、これまでの校種の壁を超えた教育研究を目指そうとしている。

いま教員養成・教師教育の存在意義が問われている。知識基盤社会に対応できるグローバルな視点を持った教員の養成ができるか、そして、教員生活30年の職能成長を支えられるシステムを構築できるかがカギとなる。そのためには大学の体質改善が欠かせない。今回の事業が承認され、教師教育改革が動くことを期待したい。



報道FILE

▲ 朝日新聞社提供
2013年10月11日 朝刊

October 合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース1年／あわら市芦原中学校 石崎 隆幸

朝夕肌寒さも感じるようになった10月19日の土曜日、夏の集中講座以来約2ヶ月ぶりに大学へ登校した。通学にかかる時間の感覚を忘れていて、1時間ほど前に大学に着いた。ほどなくコラボレーションホールに行く、にこにこ顔で談話している先生方がたくさんいらした。和気あいあいとしたこの雰囲気は懐かしかった。

今日のテーマは、『新しい世代を支え学び合うことの意味』である。まず、『新しい世代を支える』と題し、附属中の森田先生からの報告があった。附属中へ赴任された先生との同僚性をどのように構築していくかについて、研究組織を中心とした授業づくりへのサポートの取組が報告された。異動してきて子どもの様子もわからない状態で「教育研究集会」の準備をどのように行っているのか、そのためのサポート体制づくりをどのように行っているか報告された。次に、『CST活動における実践コミュニティ』と題した福井市豊小の柘川先生からの報告があった。CST組織について、自主啓発型のプログラム、CST活動や研修会の様子、さらに実践コミュニティづくりをどのように行っているかについても報告された。その中で、「現状のニーズに答える」、「無理のないリズム」、「理解あるメンバーを集める」、「元々ある組織を利用する」、「情報の発信を心がける」、これら5つの省察を挙げられていた。2つの報告を聞きながら「私は、学校でどのように先生方へ働きかけているだろうか」、「私の学校だったら、どんなことができるだろうか」などと考えていた。

グループ・セッションでは『新しい世代を支え学び合う経験と長期実践報告・1年目のまとめの構想を語り合う』と題し、勤務校での「支え学び合う経験」について報告があった。私のグループでは、生徒指導担当の立場から「授業を頑張りましょう」と自主研究会を立ち上げ実践を重ねている様子、教育実習生とのかかわりの中で自分自身を振り返っている様子をお聞きした。自分はどうであろうか。研究主任として、学年主任として、数学科、親睦会担当、PTA担当…、それぞれの立場でどのような「支え」を行っているのか振り返ってみる。先頭に立って動いている自分、縁の下の力持ちになっている自分、背中を押している自分、先生方のパイプ役になっている自分…、いろいろな立場の自分を改めて見つめ直

して報告させていただいた。そして、時と場合の的確な判断をした支えができるようになりたいと思った。

午後は、『実践を語り、聴き、ひらく』をテーマに、『自分自身の実践の挑戦を語る～授業実践の挑戦、探究の過程を語り聴き合う』グループ・セッションを行った。教科でグループを作るとほぼ同じメンバーになる。何回も顔を合わせていると気心が知れ、各先生方のこれまでの取組みやそのバックグラウンドも思い出しながら報告を聞くことができる。そして、その報告の中で関心事、疑問点、今後の展望などが共有でき、有意義な時間になる。私は、日々の授業の中で「報告できるようにやってみよう」と心がけて実践するようになったこと、いろいろな実践報告を聞いたり読んだりしたことを基に、自分なりに生徒の実態に即した実践をしていることなどを報告させていただいた。数学を学ぶことを通して「自分の考えを他の人にわかるように筋道立てて説明できる生徒になって欲しい」、「最後まであきらめずに考え抜く生徒になって欲しい」という私の思いも話した。また、小中高のつながりを感じることでできるような指導や、これまでに学んできたことを振り返らせるような指導も必要であると再認識した。

カンファレンスでは、自分自身を語ることで自分自身の価値観をとらえ直し、かつ考え方や行動をも振り返ることができる。そして、先生方からの報告を聞くことで、これまでの自分の取組み、これからの自分の取組みを考えることができる。自分の取組はどうであったか、自分だったらどう取り組むか考えることができる。

久しぶりのカンファレンス、コラボレーションホールでは上着を脱いで熱く語っていらっしゃる先生が多数いらした。ホールの暑さは先生方の熱気によるものであった。



教職専門性開発コース1年／福井市至民中学校 河邊 里紗子

10月の合同カンファレンスでは予備日程に参加しました。今回のカンファレンスでは、教職大学院の意義を実感する1日となりました。4月当初の合同カンファレンスでは、スールリーダーの先生方を前に、不安と緊張でガチガチでした。そのため、自分の発表の順番が回ってきても、作ったレジュメをそのまま読み上げるだけで精一杯でした。しかし、今回のカンファレンスでは緊張も少なく、レジュメがなくても落ち着いて自分の言葉で伝えたいことを話すことが出来たと思います。話すことが苦手だった自分が、徐々に話せるようになってきたことは、毎週の木曜カンファレンスを始めとした、合同カンファレンスや集中講義、ラウンドテーブルでの話し合いの経験から、知らず知らずのうちに鍛え上げられていたものであると思います。自分のカンファレンス等の記録を読み返していても、回数を重ねるごとに、話したいことがうまく話せず悔しい思いをすることが徐々に減っていき、自分が成長出来ているのだと実感できています。

今回のカンファレンスでは、5月に同じテーブルになった先生方と再び同じテーブルになりました。そして、私の発表の後に、「前は余裕がないように見えたけど、雰囲気が変わったね。表情が生き生きしているよ。」と声を掛けて頂きました。また、別の先生からも「(5月と比較して)教職大では学生がこんな風に学んで成長していくんだなということを実感しました。」と言って頂きました。そのことは、これまでのインターン

での迷いや葛藤、それに対する自分の選択や今に至る経緯は間違っておらず、迷いや葛藤と真正面から向き合い、諦めずに前に進めば、学びや成長はついてくるものなのだ、自分に自信が持てるようになりました。合同カンファレンス等は、年齢も経験も校種も違う異集団の中で様々な話を聞け、そして自分自身の話を聞いてもらえ、更にアドバイスや意見を頂けるので、教職大学院での大きな学びの一つであると思いますが、そのことを大きく実感すると同時に、温かい言葉やスールリーダーの先生方とのつながりは、教職大学院で得ることの出来る素晴らしいもののひとつであるということも感じました。

また、セッションの中で、普段副担任としてクラスを見ている私に、「クラスを見ることも大切だけど、担任の先生をよく見ておくことも副担任として大切なことから、それは忘れないで。」とアドバイスを頂きました。最近ではクラスの様子を観察し、記録することに必死になっており、担任の先生の様子は見ているようで、何も分からず、本当はあまり見ることが出来ていなかったのではとハッとしました。

今回の合同カンファレンスでは、自分のインターンでの課題が見えた上に、どんな視点でこれからはクラスに入っていかの目標も定められ、また自分に自信がついたことによりインターンに対するモチベーションも上がり、「よし!また明日からインターン頑張ろう!!」と清々しい気持ちになるという、本当に有意義

教職専門性開発コース2年／福井市中藤小学校 後藤 歩実

今年度M2となり、このテーマで最初に思い浮かんだのは、M1の存在でした。中藤小学校に院生がインターンシップとして入ったのは、昨年度からです。中藤小学校の先生方も私と瀧波院生も『インターンシップ』というものを理解しきれていないまま、『院生としてどのように学ぶか』『先生方の力になることはなにができるか』ということをメンターの先生を中心に話し合いながら、私たちなりにできる範囲で行動してきました。

今年M1が二人入ったことによって、中藤小学校での院生の存在感は強くなりました。そこで高間先生が他のメンターの先生にも共通認識としておっしゃってくれたのが『院生は学びに来ている』ということでした。その話を聞いたときに、改めて私たち自身が『学び手』であ

る自覚を強くもって行動しなければならないと感じました。また、4人に増えたことでより、多くの学年の子どもの様子や先生方の指導の様子を知ることが出来るようになりました。そういった学びを院生同士で共有していけたらそれだけで学びとしてより深まっていくのではないかと考え、放課後には、なかふじルームを使わせていただき院生が自由に話したり、振り返りをしたりすることが出来るようにしました。

そこで、4人で話していると、それぞれの院生の教室での立ち回り方、メンターの先生の指導の仕方や子どもの見方も違うのだということが見えてきました。院生としてそれらの違いを共有して、『こんな入り方もあるんだ!』『こんな風に子どもとかかわるやり方もあるん

だ!』ということを知ること、インターンシップの幅をつくること、またその時のクラスの状況やメンターの先生のニーズにこたえつつ、自分の学びに貪欲に柔軟に動けるような環境にしていけたらいいと感じています。

この話をテーブルでさせていただき、附属中学校の森田先生は学校によっても院生の立場というのは違いがあるとおっしゃっていました。中藤小学校としての院生の学びがどのようなスタイルになっていくのか…楽しみなようで、これでいいのかと悩むこともあります。それは私自身がM2としてできているといっても4人で話すことのできる場と機会を設けることくらいしかないという

現状があるからだからだと思います。もっともっと瀧波院生はもちろん、M1の二人ともたくさん話をし、一緒に悩み、思いをぶつけあいながら、一緒に考え、中藤小学校のインターンシップのスタイルを作っていけたらと思います。

最後に、11月には中藤小学校の研究大会があり、院生の授業実践も本格的に始まってきます。院生同士でお互い刺激し合い、協力し合いながら、これからも高め合っていきたいと感じています。

スクールリーダー養成コース2年／高浜町立和田小学校 山本 毅

今年度5回目となる合同カンファレンスが10月19日に行われ、「新しい世代を支え、学び合う」をテーマに、教師集団の協働の意味と、世代間交流・継承の意義について学び合った。

初めのオリエンテーションにおいて、福井大学附属中学校と福井市豊小学校の各研究主任の先生から本テーマに関わる実践報告を聞かせていただいた。まず、附属中学校からは、毎年、附属中学校に赴任してくる新任教員に対して同僚性を構築していく取り組みが報告された。附属中学校では、毎年6月に研究集会を開催しているが、それに向けて4月から6月までの間に、新たに赴任した先生が学校に慣れて同僚性を築いていけることを最重要課題としている。すなわち、どの先生も学校の研究体制の軌道にのることができるよう尽力しているのである。そのために構成しているのが4つの「部会」である。各部会は4～5名の少人数構成で、担当教科が異なる、そして在籍年数も多様なメンバーの集まりである。この部会は週1回定期的に開かれ、気軽に授業公開をし合ったり、部会が担当する提案授業の検討を行ったり、あるいは日々の実践、悩み、疑問や課題といったことを話し合ったりしている。これについては、夏季集中講座の第1サイクルで著書「専門職として学び合う教師たち」を読ませていただいたので、この「部会」が附属中学校の綿々と続く研究を持続・発展可能なものにしていくことを理解することができた。

続いて報告された豊小学校の実践は、CST（コア・サイエンス・ティーチャー）養成事業を起点に実践コミュニティを発展させていこうとする取り組みについてであった。「CST養成事業」とは、子どもの理科離れが進む現状の裏には小学校教員の理科離れの実態があると捉え、「幅広い理科実践能力を獲得した教員を育成する」ことをねらいとして、地域の理科教育を推進しよう

とするものである。豊小学校ではCST教員である研究主任の先生がコーディネーターとなり、6年担任集団で理科勉強会を実施している。これが、理科の授業に行き詰まりを感じている若手教員を支え、互いに学び合える教師集団の協働の場となっているのである。この理科勉強会こそ「実践コミュニティ」であり、若い世代を支え、学び合うコミュニティとして機能していることに大いに学ばされた。研究主任の先生は、この理科勉強会の取り組みを次のように省察し、今後の持続的な発展に努めている。一つ目が「ニーズに応える形で行うこと」、二つ目が「無理のないリズムで行うこと」、三つ目が「理解できるメンバーを集めること」、四つ目が「元々ある組織を生かすこと」、五つ目が「情報の発信を心がけること」の以上である。「実践コミュニティ」を発足させる上での貴重な提案をいただき、ぜひ参考にしたいと思った。

その後のグループセッションでは、グループメンバーの各校における取り組みや実践例を紹介し合った。その中で特に印象に残ったのが、次の二点であった。

・「若い世代」とは、教職年数の少ない教員だけを指すのではなく、異動等により新たな学校に赴任するベテラン教員もまた新任校においては「若い世代」となる。

・「若い世代」は、その学校に新たな風を吹き込む貴重な存在となりうる。

自分自身、現任校での在籍は2年目で、昨年度はまさに「若い世代」そのものであった。何をすることも勝手が分からず、卓越した同僚の先生の指導のありさまを見て、とにかく学ばなければやっつけられないと必死の一年目を送った。その時の支えとなったのは、教師集団が協働する体制の中で日々の実践に臨めたことだと思っている。小グループによるワークショップ形式の研修会、お気軽授業公開、一人1テーマ実践報告会など、決して孤

立することなく他教員との交流と学び合いがあったからこそ、今の自分があるのものと考えている。

一方、継続的な取り組みによって築かれてきたその学校独自の文化を発展させていくためには、「若い世代」が継承の担い手となるよう成長していかなければならない。だからこそ、「若い世代」を支えるような教師集団が求められるのである。しかし、「若い世代」は学校に新たな風を吹き込む貴重な存在として、学校文化そのものを見つめ直させたり、飛躍的に発展させたりもする。学校の中に見えているようで見えないことがある。また継続して取り組んできたことも、さらなる改善を要することがある。そのようなとき、外部からの見方

や指摘はたいへん貴重なものとなり、中にいる者にとっては改めて気づかされることもある。「若い世代」との学び合いという点から、「若い世代」が自分の意見や考え方を表出できるような同僚性もまた重視されなければならない。若い世代を支えることと、若い世代と学び合うことはまさに一体のものと考えられる。本校の学校教育目標「つながり合い、認め合う児童の育成」は、教師集団が「つながり合い、認め合う」関係を構築していったこそ可能になるものと考えられる。そのような教師集団の姿が、子どもに還元されていくということを常に意識していきたいと思う。

拠点校だより

小浜市立雲浜小学校

富士 健一

本校は、校区が小浜市の中心部に位置しながら、南川と北川の河口に挟まれ小浜湾に面した自然豊かな環境にある全校児童194名（4年生だけが2クラスで残りの学年は全て1クラス）の学校です。雲浜小学校は平成21年度より、「授業力の向上」によって、子どもたちの学力や生活力の向上を図ろうと、鯖街道体験学習のような価値ある体験や子ども同士の縦横のつながり重視したコミュニケーションなどを基盤に、子どもの自主性や主体性を育む学習を意図的に構成するよう努めてきました。「子ども中心のわかる楽しい授業」をいかにして実現していくかを大きなテーマとし、そのために授業観の転換を図る



努力をしたり、実感を伴った学びによって子どもたちの思考力や認識力を高める手段を講じたりしながら、「授業公開の充実」と「課題改善特化型授業研究会（雲浜式ワークショップ）」を中心に研究を進めてきたのです。その結果として、難しい家庭環境にあつて学力面・生活面ともに低位な子どもや発達障害的な要素を持った子どもが多い中でも、学校として負のスパイラルから抜け出し、子どもの学習意欲を高め、学力の向上と生活の改善に大きな伸びを示すことができるまでに改善していきました。しかし、その過程では、教員の中に様々な葛藤と苦しみがありました。「子ども中心の授業による子どもの育ち」という目指すところが分かっている、そこに到達する明確なイメージがつかめなかったり、そこに至るためのすべが分からなかったり、踏み込みすぎたり欲張りすぎたりして失敗したりと試行錯誤の連続でした。求められる期待がやらされ感へと変わって教員間に閉塞感が生まれたり、価値観の相違に伴う子どもを導く方法や手段への対立が引き起こされたりすることもたくさん起こりました。しかし、その都度メンバーが大切にしてきたものは、「子どもの豊かな育ちへの強い願いと育てるプロとしてのプライド」であったように思います。特別その言葉を題目として唱えたり共有していたりしたわけではありませんが、研究副主任・研究主任（学級担任）、教務主任（フ

リー) という立場を経験して雲浜小学校5年目の今に至る自分がこれまでの歩みを振り返った時、自分自身の気持ちを含めてそう実感します。そして、それぞれが自分の実践している授業のことやその日その日の子どもたちの様子などを前向きな言葉で語り合うのが当たり前になり、職員室が自然に子どもの育ちを全員で支える「実践コミュニティ」へと変化してきたように思います。自分だけの価値観ややり方に固執して派閥を作るような年輩の教員が誰一人としておられなかったばかりか、管理職を含めた年輩者の方々が対話することを大切にされ、若手や中堅にさりげない気遣いや明るい雰囲気、話しやすく居心地のよい職場を提供してくださっていたことも、教職員の「協働」を進める大きな足がかりになっていたように思います。私自身も、そういった雰囲気の中で自分自身を客観的に見つめ直したり、組織全体の中で自分を生かすにはどうしたらよいかといった全体を見渡せる目を育てていったように思います。教職大学院に行って学んでみようと思ったのも、自分自身や子どもたちをもっと伸ばしたいという気持ちばかりでなく、雲浜小学校のこれからを真剣に切実に考えられるようになったからであるように思います。

今年度、学校長、教頭、教務、養教といった学校の屋台骨となる先生方が一気に退職・異動され学校組織体制が一新された上、長期病休教員の学校復帰と担任クラスへの支援、校舎全体の耐震工事、職員室の移転、ミドルリーダーの突然の病休など、次々と難題が押し寄せてきました。しかし、そうした困難な状況の中にあっても、学校長の「ピンチをチャンスに」「一に子ども、二に職員」「チームうんぴん」「人に幸せを与えるために、満足から感動、そして感謝へ」という言葉のもと、明るく前向きな言葉が飛び交う職員室の中で教職員のチーム意識が高まり「協働」が進んでいることを日々実感しています。子どもたち

もまた、「不登校ゼロ」「いじめゼロ」でのびのびと元気に学校生活を送り、「チームうんぴんの誇りと伝統」というバトンを受け継いですばらしい活躍をしてくれています。



難しい問題や困難な状況が起こるのは、教職員集団も子ども集団も同じです。雲浜小学校が今、数々の困難を乗り越える力を持ち得ているのは、個々の教員の力量もさることながら、「授業力の向上」という小浜市の命題に、その指定を受けて取り組みはじめてから今日まで4年半の実践の積み重ねと省察によるものだと確信しています。「たくましく、心豊かな雲浜の子～21世紀をたくましく生き抜く子どもを協働して育てます～」という学校教育目標が語るのは、主体性を持って学ぶ教師が一本の束になり、子ども中心の授業や活動を通して学校全体で子どもを育てていくことの大切さだと思います。財産に頼るのではなく、新たな未来を築くためにチャレンジしていきたいと思っています。

福井東特別支援学校月見分校

徳丸 郁子

1 福井東特別支援学校月見分校とは

福井東特別支援学校は、本校、月見分校、五領分教室があります。私の勤務する福井東特別支援学校月見分校(以下、「月見分校」とする)は、福井赤十字病院内に設置された学校で、病弱の子どもたちを対象としており、3つの学部(小学部、中学部、高等部)があります。

月見分校に在籍する子どもたちは、在籍期間を見ても、小学部入学から高等部卒業までの長期にわたり在籍する者、地域の学校間で年度の途中で転出入する者、地域の学校から中学部や高等部へ入学する者など様々です。また、慢性疾患による生活規制が多いために社会経験が乏しかったり、前籍校での不登校や不適応によって学習空白が大きかったりするなど、学習課題や能力の違

いは多様です。さらに、心身症や発達障害の二次障害、精神疾患等の子どもたちが増えてきており、カウンセリングや個別の学習支援といった対応だけでは、子どもたちの課題に十分応えられない場合もあるなど、ますます子ども一人一人のニーズに応じた支援とその充実が求められています。

2 取り組み

子どもたちのニーズに応えるためには、学部や教科の枠を超えた学び、そして教育活動全体の中で「子どもの学び」について複数の目で多面的・多角的に捉え、自立、社会参加を見据えた子どもの成長をどう支援していくかについて考える必要があります。

そこで、「教員同士がそれぞれの持ち味やこれまでの経験（知識や技術等）を積み重ねた、いわゆる『引き出し』を互いに活用し合いながら（相互交流）、全員で共有し、自由で自然な意見交換を行うことで、学び合いが生まれ（協働）、それが子どもたちへの有効な指導や支援、活発な実践を生み出すのではないか。」「同僚の教員と協働して共に振り返ることにより、見落としていた事実が浮かび上がってきたり、実践から得られた事実がいろいろな視点から捉えられたりすることが可能になり、教員同士の学び合いが生まれるといった新たな同僚性を育むことになるのではないか。」と考えました。そして、教員集団の「学び合い・聞き合い・支え合い・関わり合い・活かし合い」を目指し、以下に示した各実践（①～④）に取り組んでいます。

〈実践①〉グループ研究

研究係が設定したキーワードを元に、学部や教科の枠を超えたグループを編成し、各グループのチーフを中心に毎月研究会を開催しながら、実践を重ねています。今年度は、〈キャリア教育〉、〈コミュニケーション・社会性〉、〈子どもに応じた力をつける〉、〈特性の理解と支援〉の4つのグループがあります。



グループ研究会の一場面

〈実践②〉実践を記録に残す

授業記録や子どもたちとの関わりの記録を日々書きため、それを元にグループ研究会や実践交流会等で、長いスパンで見た子どもたちの変容について語り合っています。

〈実践③〉授業参観週間の実施

6月、10月にそれぞれ2週間ずつ設定し、その期間中は全教員が授業を公開しています。公開するにあたり、授業者は見てもらいたいポイントを示した「授業メモ」を作成し、参観者は授業記録や子どもたちの様子を「参観メモ」に記入して、授業者に返しています。また、放課後に授業者と参観者ができるだけ話し合う機会をもつようにしています。できるだけいろいろな学部、教科、教員の授業を見られるように、1週目は、自分が担当する学部、学年、クラスの授業を、また2週目は、自分が担当していない学部、学年、クラスの授業を参観するようにしています。

〈実践④〉実践交流会

8月、2月に実施しています。実践してきたことを振り返り、課題を再度整理すること、今後の取り組みの方法を探ること、他学部の教員と語り合うことを目的としています。全教員がこれまで自分が取り組んできた実践を1枚レポートにまとめ、研究グループや学部等とは異なる新たなグループで互いの実践を聞き合っています。

このような取り組みや考え方が月見分校に継承され、今後も協働して実践と省察を繰り返しながら、みんなが成長できる学校をつくっていきたいと考えています。



福井県立武生東高等学校

野坂 智裕

武生東高校は越前市東部の水田地帯に位置し、校舎の東には越前和紙で有名な今立地区があります。南側には日野山がそびえ、その全貌を仰ぎ見ることができ、北側には継体天皇の花筐伝説で有名な三里山が、遠く鯖江まで尾根を伸ばしています。創立以来30年近く経過しても、学校周辺の風景に大きな変化はなく、ゆったりとした時間が校舎を包んでいる感じがします。私はこの学校に赴任して5年目になりますが、このような環境の中、日々穏やかな気持ちで過ごしています。



本校の特徴は普通科の他に国際科が設置されていることです。国際科には、「異文化理解」や「時事英語」といった独自の科目が用意され、実践的でタイムリーな内容を学習することができます。またオーストラリアやニュージーランド、アメリカ合衆国アラスカ州の姉妹校に短期派遣する形でホームステイをしたり、逆にその学校の生徒を一定期間受け入れるホストファミリーになるなど、様々な体験をすることができます。昨年度からは、国際科2年生全員がシンガポールへ語学研修に行くようになり



ました。私は国語の教師ですが、一昨年まで国際科の担任を3年間させていただき、他校ではなかなか味わえない貴重な経験をすることが出来ました。大変感謝しています。

さて本校は6月と11月に、公開授業週間を設けています。私が大学院に通っていることで、今年度は教職大学院の先生方にも本校にお越しいただき、授業参観と研究会に参加していただきました。私は毎日福井市内から通勤していますが、自動車でも本校まで相当時間がかかります。昨年、本校職員の有志による日頃の悩み相談会のような集まりに杉山晋平先生が二度ほどお越しくださいましたが、本当に遠いところ申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。福井市内の高校であればもっと気軽にお願いできるのに、と思いましたが、杉山先生は「逆にこちらが学ぶ場を提供していただいていると考えています。」と常に快諾してくださいました。6月の公開授業には、中川美津恵先生、小林真由美先生、杉山晋平先生がお越しになり、本校の伊藤貴子先生の授業をご覧になりました。御三方とも、この参観を意義のあるものにしようという姿勢が感じられ、中川先生は褒めるべき点と改善すべき点を的確に指摘してください、小林先生は写真付きの詳細な記録と細かく温かいコメントを残してくださいました。杉山先生は我々では気づかない、生徒の微妙な変化を見とり、いつも通りわかりやすい言葉で解説なさいました。また数日後に行われた国際科の英語の授業には、ご専門が数学であるにも関わらず巨田尚彦先生が参観に来られ、その後の研究会にもご出席なさいました。巨田先生は私が大学院に入学する事が決まった時にわざわざ本校にご挨拶にお見えになり、「本当に先生が来てくれることをうれしく思っているよ。」とお声を掛けてくださいました。入学以来様々なことがありましたが、この言葉ほど私を支えているものはありません。この事は、教育の本質について考える際の重要な鍵であると思っています。

9月には松田淑子先生のお力添えをいただき、金沢大学付属高校の国語科の先生と授業力改善のための交流会を持つことが出来ました。正直、石川県のトップ校の先生方とどんな話ができるだろうと不安でしたが、お見えになられた奥村郁子先生、島村潤一郎先生は具体的かつ実践的な内容をありのままお話しください、詳細な部分での意見の交換ができたので大変参考になりました。また

私たちの我儘を受け入れていただき、後日島村先生からは、読書量と成績の向上との相関についての論文と、授業中に生徒にアハ体験をもたらす工夫についての論文を送っていただきました。この日は私と片岡岬先生、県の授業名人に認定されている大辻由美子先生の3名が授業を公開しましたが、あえて私は授業しにくいと考えていた現代文の教材に挑み、見事大失敗をしました。しかし、この日の反省と後日の話し合いの中で、自分の現代文の授業の限界をはっきり自覚でき、新しい見方を模索するようになりました。このことはまた修士論文でまとめたいと考えています。

勤務校の外の方々との連携は時として強い緊張感を伴いますが、惰性的になりがちな我々の仕事に新しい波を起こしていただくきっかけになります。最後に校長先生、教頭先生をはじめ、多くの先生方のご配慮、ご協力に感謝申し上げます、私の報告を終わりたいと思います。

■ 福井大学教育地域科学部附属幼稚園

第26回 幼児教育研究集会に参加して

教職専門性開発コース2年 筏井 紀代美

私が附属幼稚園の幼児教育研究集会に参加するのは今年で3度目です。一昨年・昨年と、幼児たちの可愛らしさはもちろんのこと、幼児ひとりひとりの発達段階や個性などによっていろいろな言動が生まれ、その多様性の高さや、そこで繰り広げられる人間模様がこちらにもよく伝わってくるため、非常に興味深く感じていました。また、一人の参観者としてだけではなく、「遊び」という形で、子どもが様々なモノやヒトと関わって新たな疑問や認識を持ち、モノやヒトとの関わりを広げていく過程を支える、教師の役割についても学ぶことができるため、私はこの研究集会に参加できることを非常に楽しみにしていました。当日、私は主に4歳児の様子、特に「もも組」の教室で行われている「森のレストラン屋さんごっこ」に焦点を当てて参観していました。この遊びは、遊びの中心になっている子どもだけでなく、他の子どもも気軽に「お客さん」として参加できることが特徴です。私は子ども同士の遊びがどのようにして広がっていくのかを観察したいと考えたために、この遊びの変化を追っていかうと考えました。

レストラン屋さんには主に数名の女の子たちによって運営されていました。ウエイトレス、コックなどは幼児が担当し、先生は主に裏方として、食べ終わった皿の片づけなどをしていらっしゃいました。幼児はレストラン経営のいわゆる「華」となる部分を任せてもらえることで、やる気に満ちていました。幼児に人気だったのはやはりウエイトレスで、ウエイトレスは常に3～4名程度

いたのですが、お客さんが何か注文をした時には、その3～4名のウエイトレスがコックに向かって一斉に注文を行い、「わたしに運ばせて！」とばかりに一生懸命にアピールする様子が見られました。途中で、別のところで遊びをしていた先生も数名の幼児とともに「お客さん」としていらっしゃいました。その先生は、メニューを見て、「おすすめのケーキを下さい！」とウエイトレスの幼児に注文をされました。ウエイトレスは「おすすめのケーキ」と言われて戸惑っていたのですが、コックと相談しながら一つのケーキ（おそらくモンブラン）を選んでいました。その後、遊びを通してウエイトレスやコックの幼児たちの様子が少しずつ変化してきました。ウエイトレスがお客さんに注文された品を提供するとき「お待たせしました」と一言添えたり、食べ終わった皿がコックのほうに運ばれてきたら、コックが「はい、ごちそうさまでしたー」と言ったりなど、他者をいたわる言葉が聞こえるようになり、非常に微笑ましく感じていました。ウエイトレスやコックはお客さんよりも遊びの中で工夫できる余地がたくさんあるために楽しく、また、他者に対する言葉がけも多様なものが生まれやすくなるのだと感じました。遊びの中で、子どもが工夫できる余地をどのように作っていくかを考えたいと思うようになりました。また、周りの様子をよく見た上で、柔軟に自分の役割を変えていく幼児もいました。ウエイトレスをやっていた幼児の一人なのですが、ウエイトレスの人数が過剰になっていると判断したようで、途

中からウエイトレスをやめてレジに向かいました。レジには先生もいらっしやり、その幼児は先生の隣に座りながら、お客さんが食べ終わってレジのところに来るまで先生と話しながら待っていました。このように周りの様子をよく見た上で柔軟に動くことのできる幼児の姿を見て、4歳児は子どもによって発達段階の差が大きい時期だと言われることを思い出しました。この遊びの様子を見ると、様々な人間模様、幼児の性格などがはつきりと出ていて、非常に興味深かったです。

分科会の中で、福井大学言語教育講座の松友一雄先生が「つなぐ」ということについておっしゃっていました。「つなぐ」にはいろいろな種類のものがありますが、この幼稚園の今日の保育の中で生まれていた姿として、「昨日の遊びが今日の遊びにつながっていく」ということをおっしゃっていました。「好きな遊び」や「みんなの時間」等が上手くつながり合い、一人ひとりの幼児の声に耳を傾け、遊びを広げていく先生の関わりが、

結果的に「昨日の遊び」が「今日の遊び」につながっていくことを促し、支えているのだと考えるようになりました。

私は、これまでの院生生活の中で、「子どもの経験や意見等に教師がどう価値づけをし、どのような方向性を与えていくかが、その後の学び（遊び）の質を左右する」ということを実感してきました。子どもの自発的な行動を促せるような人的・物的環境を整えていくことに興味を持ち、日々学んでいます。そんな私にとって、今回の幼児教育研究集会は非常に学びの多いものでした。この研究集会で学んだことを、教員としての専門性を培うために活かし、今後の課題別実習も更に有意義で充実したものになるように、積極的に取り組んでいきたいと考えます。

■ 平成25年度

学校組織マネジメント指導者養成研修に参加して

福井大学教職大学院 准教授 小林 真由美

10月7日から11日の5日間にわたり、つくばにて学校組織マネジメント指導者養成研修が開催された。9年前に中央研修で1か月間滞在した教員研修センターは、懐かしく思い出の多い場所である。こうした全国から集まる研修で得られる人とのつながりは大変貴重なもので、9年前に出会った友、6月のラウンドテーブルに来ていただいた鳴門教育大附属の宮本先生、横浜市教委の木村先生にも再び巡り会い、さらには、またこの1週間にも新たなつながりをたくさん持つことができた。そして何より、私の中で「学校を創るとは」ということに対する具体的なイメージと、「こんな学校をみんなで創りたい」という自分の夢が広がった貴重な研修であった。

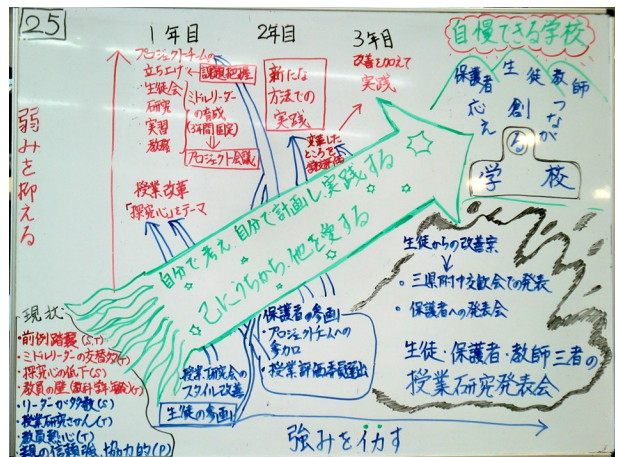
組織はリーダーの「管理力」と「感化力」で動く。「管理力」に関しては、「長」と名がつけばその命令で、いったんは人が動く。しかし、自分の会社の不祥事で管理職が頭を下げる姿がテレビに映し出された時、多くの社員がその上司に「ざまあみろ」と思う会社では、「効果性の高い組織」はつくることできない。この人とならいつしよに何かをしたい！と人に思わせる「感化力」は「どうすれば人が自分のために働いてくれるか」を考えることから始まるという。3人の石工の話が印象

的であった。全く同じ仕事をしている石工なのに3人の表情が違う。眉間にしわを寄せているA、淡々と取り組むB、楽しくてたまらなそうなC、3人に「何をしているの」と聞くと「石を刻んでいる」とA。「柱を作っている」とB。「教会を作っているんだ。これはその柱になるんだよ」とC。成し遂げたいことが描かれている状態、つまり最終的に実現したいことのイメージが全員に共有されているならば、強制や功利を超えて、言われていないことまで積極的にやるようになる。確かに1つの学校の中で、全職員の心からの「こうなりたい」が統一されていれば、みんなが協働して動き出す。ではその「こうなりたい」をどうやって形成していくのか。学校組織マネジメントの第一歩は、その「共有ビジョン」を形成することである。研修の中ではSWOT分析を利用したが、互いに学校を知り尽くしている教員同士なら、語り合うことでその「共有ビジョン」を見つけ出すことができる。そこには学校評価や学力調査といった客観的な根拠も必要であろう。評価情報を活用して、真剣な課題分析をした「共有ビジョン」ならば、その使命感が全教職員に浸透するはずである。さて、それを本当に実現させていくためには「人」も「お金」も「学校以外の協働」も上手に使っていかねばならない。ミドルリーダー

を上手に活用して運営組織体制をどう組むのか。お金はどうやって運用していくのか。多忙に押しつぶされず楽しく意欲を継続するにはどうするのか。地域は、保護者は、卒業生は、出口校は、入り口校は、どう巻き込んでいくのか。それが「ヒューマンリソースマネジメント」であり「財務マネジメント」であり「ヘルスマネジメント」であり「学校組織マネジメント」である。その方法論についてはここに記載しないが、どの内容も目から鱗の新鮮な学びであった。例えば、自分が昨年、教頭として学校で勤務してきた際にも、財務をマネジメントしようなどという考えはほとんどなかった。与えられたお金を必要に応じてやりくりしていただいただけである。どのくらい、お金があり、何にどう使うべきで、それは学校の目指すところときちんとつながっているのか、使った後にはそれを見直して評価し、どのような効果があったかを振り返り、継続か、拡充か、廃止かを判断する。そしてそこで必ず事務職との協働を働きかける。考えてみると、こうした子どもたちとは離れた取り組みと考えられることも、全ては「子どもの笑顔」のために動いているはずなのである。これは事務的なこと、と切り離していることが大きな間違いで、事務職の方もまた、教員といっしょに一つの目標に向かって学校を創っていくために協働するチームである。みんなで一丸となって、自分のできることを精一杯、貢献して、全員でめざすてき

な学校づくりをやってみよう！という夢を自分の中ではっきりと描くことのできた貴重な一週間であった。

そしてもう一つ感じたことは、福井がこういう考え方に対して全国と比較すると遅れているのかもしれないということである。研修に来ている人の数も、学校の取り組み状況も、そして管理職の方々のお話の内容も他県に比べるとまだまだ浸透してきていない気がした。それは行政レベルの働きかけとともに、これからの教職大学院の課題でもあるのかもしれない。まだまだ不勉強な自分自身も夢の実現に向けて勉強し、「組織づくり」という課題に取り組んでいきたいと考えている。



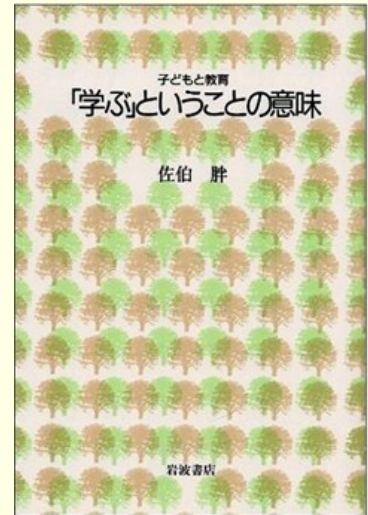
学校組織マネジメント指導者養成研修

| プロローグ | マネジメント概論 | 戦略の作成 | 資源の活用 | エピローグ |
|---|---|---|--|---|
| <p>教育改革の動向と学校経営(文科省視学官 中尾敏明) 今、学校に求められること</p> <ul style="list-style-type: none"> 指導要領の改訂 言語活動の意義 学校評価の活用 <p>自校の検討(演習形式) SWOT分析を中心に課題と戦略を探る</p> <p>課題の共有(グループディスカッション形式) 自校を紹介し戦略を語り合う</p> | <p>リーダーシップとマネジメント(イマージェンタ社長 森原泰紀) 民間の組織経営論</p> <ul style="list-style-type: none"> 管理能力と感化力 効果性の高い組織作り <p>メンタルヘルスマネジメント(三葉病院 真金薫子)</p> <ul style="list-style-type: none"> ラインケアとセルフケア 早期発見 適時介入 再発防止 <p>学校経営の基本(国士舘大学 北神 正行)</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校教育目標の見直し 授業・教員・経営の3視点からの質の保証 改善の4ステップ <p>モデル校の実践発表(発表とフリートーク)</p> | <p>戦略マップの作成演習① 自校のめざす子ども像・学校像・教師像を多面的に探る(保護者、地域、卒業生、入り口校・出口校)</p> <p>戦略マップの作成グループ演習② 自校の課題と現状から3年間の戦略計画を探る</p> <p>戦略マップの作成(兵庫教育大学大学院 浅野良一)</p> <ul style="list-style-type: none"> 目指す子ども像と学校教育目標 目指す学校像とミッション 目指す教師像と教師集団の方向性 | <p>財務マネジメント(京都教育大学 笠沙知章)</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育課程に合わせた予算づくり 編成・執行そして評価 <p>財務マネジメントグループ演習 戦略計画の1年間の予算書の作成</p> <p>ヒューマンリソースマネジメント(早稲田大学 河村茂雄)</p> <ul style="list-style-type: none"> セルフコントロール 対人関係力 集団参加のできない子どもと教員集団 日本独自の学級集団、教師集団づくり | <p>学校のコンサルティング(高崎経済大学 飯野真幸)</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報の発信(自校へ、地域へ、若い世代へ) 学校としての公約 子どもを巻き込んだ組織マネジメント <p>コンサルティング演習 本研修の伝達講習を企画 各自の3年間研修企画書づくりとグループカンファによるアドバイス</p> <p>最終企画書作成</p> |
| 第1, 2日 | | 第3日 | 第4日 | 第5日 |

書評

「学ぶ」ということの意味

著：佐伯 胖（岩波書店・1995年・ISBN4-00-003932-6・1800円）



「学ぶ」ということは人間的な営みの1つであり、私たちの生涯にわたって散りばめられている経験であると言えます。同時に、私たちはこの「学ぶ」という言葉を日常的によく用いています。自分自身の経験をふりかえる時、「学ぶ」ということはどのような意味をもつ営みだったのでしょうか。「学ぶ」ことを支えるというのは、どのような働きかけを指すものなのでしょうか。ふと立ち止まって、あらためてその意味を考えさせてくれるのが本書です。

私が本書に出会ったのは、今から10年前のことでした。当時、私は大学院に入学して心理学を学び始めたところでした。その夏の集中講義で、著者である佐伯先生が招かれることになりました。そして、事前の準備として手にとったのが本書でした。集中講義に備えようと気張ってページを繰り始めましたが、平易な表現でありながら本質をえぐるような文章に興奮とも高揚感とも言えぬ不思議な感覚が芽生え、時間を忘れて一気に最後に読み通してしまいました。

著者の佐伯先生は、1970年にワシントン大学で心理学の博士号を取得され、東京理科大学理工学部、東京大学を経て、現在は青山学院大学に勤務されています。1991年に出版されたJ・レイブとE・ウェンガーの共著『状況に埋め込まれた学習』をいち早く邦訳され、状況論やヴィゴツキー学派の学習理論とその後の国内の研究を架橋されたことは周知の通りです。2011年9月、イタリアのローマで開催された国際学会の基調講演で登壇され、海外でそのお姿を拝見することができました。10年前と変わることなく、それ以上に情熱的に斬新な研究を展開されているお姿に、ただただ敬服するばかりでした。

1995年に出版された本書は、「ひとりの認知科学者（認知心理学者）である私が、やっと『教育研究者』として自覚するに至ってあらわした、最初の著書」(p.214)であり、従来の心理学では収まりきらない「学習」について、佐伯先生ご自身が学ばれてきたことの表明の書としての位置づけを持っています。

さて、私たちが「学ぶ」という言葉を用いる時、そこには何らかの意味で「よくなる」という漠然とした価値や意義を抱くものではないでしょうか。その本当の価値は学ぶまではわかりませんが、だからこそこれから学んでいこうとするわけです。佐伯先生は、その期待を「学びがいい」と呼び、「学ぶ」ということを「学びがいのある世界を求めて少しずつ経験の世界をひろげていく自分探しの旅」(p.48)と捉えます。

そのような旅の背景には、その価値をともに味わい共有する他者と場（文化的実践）が存在しています。「学ぶ」ことを成立させる他者との出会い・関わり、そのような他者とともに繰り広げる文化的実践への参加を通じて変わっていく世界のわかり方、世界への向き合い方。「学ぶ」という旅を支えるそのような出会いと参加は、「学びのドーナツ論」として整理されていきます。

「学ぶ」ということがなぜ「ドーナツ」につながるのか？気になった方はぜひ本書を手にとって、その中身をご自身の目で確認されることをお勧めします。アメリカの公立高校で起こった「教えない」授業、中国残留孤児の子どもたちの「植物と人間」の授業、保育園での「ちょっと気になる子」の物語—さまざまな実践事例を通じて、その中身を丁寧にたどっていくことができます。

また、本書で扱われる事例は子どもの経験に関わるものが主ですが、随所にその学びを支えていく「他者」としての大人の働きかけについても触れられています。自分自身の「学ぶ」という経験をふりかえるとともに、自分自身がどのようにその学びを励まし支える他者として存在しうるのかを考えることもできる一冊です。

本書が出版されて18年の月日が流れました。私たちが学び続けていくためにも将来への希望を取り戻すことが大切である。本書を貫くこのメッセージは、ますますその輝きを放っているのではないかと感じます。

(福井大学教職大学院 杉山晋平)



21世紀の知識基盤社会に生きる力を育て
子どもたちの生活と成長を支える

教師の実践力を高めるために



集中授業の様子を公開します！

大学院の説明や相談タイムを設けます！

在籍中の現職教員やストレートマスターコースの院生が
どんな風に学んでいるのかを直接肌で感じ取ってください。



福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院

Petit!

OPEN CAMPUS

2013 in Winter

11/16 Sat
12:30~14:00

12/26 Thu
10:00~11:30

1/4 Sat
12:30~14:00

開催場所: 福井大学文京キャンパス
教育1号館6階つきあたりコラボレーションホール
大学までのアクセスはHPをご覧ください。
http://www.u-fukui.ac.jp/cont_about/outline/access.html

申込方法

氏名, 所属, 連絡先メールアドレス, 参加希望日を明記の上, 福井大学教職大学院(dpdtfukui@yahoo.co.jp) (担当: 半原) までメールにて申し込んでください。なお, メール の 件 名 に は 「 オ ー プ ン キ ャ ン パ ス 参 加 」 と 明 記 し て く だ さ い 。

拠点校研究会案内

11/19

(火) 13:40-16:30

■ 福井市中藤小学校 公開研究会

一人一人が輝き，共に学び合う

～さまざまな仲間と互いに考えを高め合いながら～

〒910-0837 福井市高柳3丁目3001 TEL 0776-54-3823 FAX0776-54-3874

<http://www.fukui-city.ed.jp/na-fuji-e/>

11/22

(金) 13:30-16:30

■ 福井市安居中学校 公開研究発表会

社会参画型学力の育成

～交流・体験を通して培う豊かな学び～

〒918-8076 福井市本堂町12-4 TEL 0776-37-0155 FAX0776-37-0100

<http://www.fukui-city.ed.jp/ago-j/>

11/30

(土) 13:00-16:00

■ 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 公開研究会

学校・地域・家庭のつながりの中で育つ

～一人一人が活動と参加の質を高める～ (2年次)

〒910-8507 福井市文京3丁目9-1 TEL 0776-22-6781 FAX 0776-22-6776

<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~yougo/>

※平成25年度9月より本校の校舎改修増築工事のため、福井大学文京キャンパス教育系2号館を仮校舎としています。

12/6

(金) 9:00-16:30

■ 福井大学教育地域科学部附属小学校 第39回教育研究集会

協働して学びを深める授業をつくる

〒910-0015 福井市二の宮4-45-1 TEL 0776-22-6891 FAX 0776-22-7580

<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-e/index.htm>

Schedule

11/16sat 合同カンファレンス

11/30sat 合同カンファレンス(予備日)

11/30sat-12/1sun 東京ラウンドテーブル

【編集後記】

11月になり朝晩は空気がキリリと冷える季節となりました。連山を遠くに眺めながら田んぼの中を自転車で通勤する時間が一番好きな時間です。着任して早一ヶ月、はじめは右も左も分かりませんでしたが、少しずつ福井大学教職大学院の組織の「糸」が見えるようになってきました。合同カンファレンスでは、人のつながりであるその糸の中に自分があることの有難さと心地よさを感じました。今後研究授業への参加などで、みなさんとのつながりの糸の目をより確かなものにしていきたいと思っています。(半原芳子)

教職大学院Newsletter No.57

2013.11.16発行

2013.11.16印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdfukui@yahoo.co.jp

